

2012年7月22日

硫黄島の課題

～硫黄島の抱える離島医療（産科医療）の課題～

研究科：保健学研究科保健学専攻

学籍番号：4712810064

氏名：谷口光代

1. はじめに

筆者は以前、徳之島で助産師として勤務していた。陸続きでは考えられないことがたくさんあり、離島医療について日々考えさせられる日々であった。筆者は、離島についてもっと知識を深めたいと考え、大学院全学横断的教育プログラム「島嶼学コース」を履修した。講義では、島嶼学として学ぶ島の奥深さと、また筆者が考えている「離島、島」というものを、どれだけ狭義で捉えていたかを考えさせられた。

今回、「島嶼学コース」の講義として、初めて三島村硫黄島に訪れた。茶褐色に染まった海の色を見たときは、驚きと感動であった。噴煙を上げる硫黄岳。自然に恵まれた素晴らしい島だ。一泊二日といつても硫黄島の滞在時間はとても短かったが、とても内容の濃い充実した時間であった。その短い時間の中で、診療所で働く看護師と保健師から話を聞くことができた。以下に、硫黄島で働く看護師と保健師の話と硫黄島で自然や島民と触れながら感じたことをもとに、離島医療（産科医療）についての課題を述べる。

2. 硫黄島の抱える離島医療（産科医療）の課題

硫黄島で看護師兼ケアマネージャーとして勤務する T 看護師に、忙しい中 30 分程度硫黄島の医療の現状について話を聞くことができた。

硫黄島の診療所には看護師 1 名がおり、医師は、3 ヶ月ごとに鹿児島赤十字病院から派遣されているということだった。救急搬送は日中日没までは鹿児島市内からドクターへりが、夜間はヘリコプターを要請して、鹿児島市内の病院へ搬送している。しかし、天候が悪い時は、ヘリコプター搬送はできず高次医療の救急処置が行えないのが現状である。このことは、住民にとっても医療者にとっても不安の 1 つと考える。

診療所には、診療所と鹿児島日赤病院を結ぶ医療画像伝送システムが導入されており、外傷をした時などは特に、その状態を、画像を通して医師に診てもらうことが可能である。そのシステムを活用し、他の離島などと会議をすることもあるということであった。

離島の医師には、全科にまたがる幅広い臨床の知識や救急にも対応できる能力が求められ、一人で地域住民を診療することへのプレッシャーが大きな負担になるなど厳しい現実もある¹⁾。

医師が診断をし、医師の指示の下で業を行う看護師にとって、島内に医師が常駐していないこの現状では、看護師の抱えるプレッシャーは相当なものだと考える。医療画像伝送システムを利用し、離島間、鹿児島市あるいは鹿児島県とのつながりを増やし、会議やディスカッションする場を設けることで、離島の抱える問題を共有し、共有の問題として解決していくのではないだろうか。

硫黄島住民の健康を守る T 看護師は、ケアマネージャーでもあり、「高齢者は、診療所に来るだけでも大変。暑い時はなおさら。そのため、診療所で待っているのではなく、一日 2 回、時間を決めて家庭を巡回しています。家庭をまわることで、診療所ではみることのできない生活背景などがわかります。」と話された。診療所で病人を待っているのではなく、

自ら家庭を巡回することは、住民の安心感にもつながり、看護師の存在も身近に感じてもらえる。そして、生活背景をみることで、そこから、その人の病気や生活の改善につながることができ、結局は島民の健康の維持・増進につながっていると考える。T看護師が言ったように、高齢者は診療所に訪れるだけでも労力を必要とする。病気を抱えていたらなおさらであるため、T看護師の行なっている家庭の巡回はとても重要な役割を担っていると考える。

産科に関しては、三島村に保健師として勤務しているS保健師に少しだけ現状を聞くことができた。

まずここ数年出産数はない。もし、妊婦がいれば妊婦健診は島内ではできないため、鹿児島市内の病院に妊婦自身が通わないといけないということであった。筆者はまず、出産がない理由がわからなかつたが、人口動態や島民の話、島の状況を知ることで、その理由がみえてきた。国勢調査によると、島の人口は、昭和35年は604人いたが、年々減少し、平成24年は110人になっている。高齢化率は、平成12年は25.3、平成17年25.7となっており、急激な人口の減少と共に、少子高齢化進んでいる。また、村内（三島村）には高等学校がないため、中学校卒業と同時に10人前後の子供たちが、村外の高等学校に進学するために村を出て行くが、卒業後に帰村する者ではなく「若者が去り老人が残される」という過疎地特有の人口減のパターンとなっている²⁾のが現状である。

谷川は、「人口の現状は、雇用の場の欠如が主因であるといえる」と述べている³⁾ように、島内に就職先がなく、地元に帰ってきたくとも、結局働き口がないために帰ってこれないという現実があると、島民の声から現状を聞くことができた。これも島にとっての大きな課題である。

徳之島の出生率は、全国の1～3位を3町が占めており、医師や助産師の確保が難しいながらも、現在は島内で産声をあげることができている。与論島、加計呂麻島は、医師がないために沖縄、奄美大島での出産となっている。島内で出産できないのは、産みたくても医師不在のためだと思っていたが、人口減少と過疎化が進み、働き口が少ない島では出産する年齢の人たちが少ないとによって、出産がないという現状を知ることができた。医師の確保が厳しい離島医療の現状の中で、島内で出産することが難しくても、まずは島内に妊婦さんが増え、島内で子育てる姿が増えることを願ってやまない。そのためには、様々な要因が関連していることも理解することができた。

その一つの要因として、島に働き口が少ないとということ。いつまでも「島に働き口がないから」といっていては何も変わらない。一人ひとりがどうすればいいのか考え、行動することが第一歩であり、大事なことであると考える。三島村の総務課のO氏も、「諦めてはいけない。変えられると思って一人一人が考えることが大事。」という言葉には、島を愛し、島を活性化していくことの情熱を感じた言葉であり、問題解決や改革には必要不可欠な思いだと感じる。思いだけでは簡単には変わらないが、諦めた時点で、先には進まない。

硫黄島小中学校の校長先生が子供たちに伝えていることも、近い将来少子高齢化の歯止

めをかけることにつながっているのではないかと思う。「子どもたちに島のことを知ってもらい、島の素晴らしさに気づいてもらう。知るだけではなく、他の人に伝えられるようになるところまでが必要である。」ということだ。

筆者も日本を離れ海外で過ごした経験がある。その時に、日本のこと興味をもつてくれる海外の友人に日本を説明できない自分に気づかされた。逆に、海外の人が日本を知っていることにも驚かされた。そして、日本を離れたときに日本を客観的に見ることができ、日本の素晴らしさ、当たり前だと思っていたことが実はおかしなことではないだろうかなどと、様々なことがみえてきた。筆者は、日本のこと、故郷である鹿児島のことはもちろん、生まれ育った町について詳しく知ろうと思うようになった。身近な場所ほど素晴らしさに気づかないのだ。校長先生が話されたように、子どものころから育った島のことを知ることは、高校から島を離れなければならない子どもたちにとって、島外の人たちに島のことを説明できることは誇りとなり、生まれ育った島を大事にしようと思うことにつながると考える。そして、今気づいていない子どもたちも島を離れたときに、校長先生の教え、心に気づくのではないだろうか。

島には自然とみどころがたくさんある。人口減少に歯止めをかけようと、島の活性化に力を入れている。島に生まれ育った人、観光で訪れた人、ジャンベスクールに滞在する留学生、そして筆者のように講義の一環として島を訪れる学生が、島を知り、島の課題を真剣に考えていくことが、島の活性化につながっていくのではないかと考える。

帰りのフェリーの中で、少しだけ保健師のS氏に話をできる時間をいただき、今年久しぶりに1名母子手帳をもらいにきたという嬉しい話を聞くことができた。島内に1名の妊婦。ここ数年いなかつたからとても嬉しい話ではあるが、島内に一名しかおらず、同じように話す仲間が周りにいなことはとても心さみしいものだと考えるし、母子を支える課題があると考える。初産婦であれば、妊娠、出産はもちろん、子育ては常に不安がつきそうものだ。島内では、子育てをしている母親や、近所の人たち、そして保健師のS氏が心強いサポートとなると考える。島内の出生数の現状は年間0～1人であるが、先ほど述べたように、今後島が活性化し、島内で産声をたくさんきけることを願いたい。

3. おわりに

離島での医療は、どうしても孤立した状態となってしまう。導入している医療画像伝送システムが有効活用され、離島間、鹿児島県全体を結ぶ役割を担うことができたら、離島が多い鹿児島県では特に、離島の抱える問題など大きな1つの声となって、問題解決につながるのではないか。そして、硫黄島の島民の熱い思いをいっぱい感じた。きっとこれから硫黄島の観光や経済が活性化し、島で産声がきこえ、島の人口が増えることを期待したい。

【付記】

硫黄島で過ごした時間は短かったが、有意義な時間を過ごすことができた。その中で短

い時間ではあったが、離島医療（産科医療）について話をしていただいた、T看護師、S保健師の話は貴重であり、忙しい中時間を割いていただいたことに感謝したい。聞いた情報と、硫黄島で感じた思いで、今回の離島医療（産科医療）についての課題を見出すことは非常に難しかった、とても貴重な時間となった。

今回お世話になりました役場の方々、ジャンベスクールの校長先生、硫黄島小中学校の校長先生、硫黄島住民の皆様、お忙しい中、貴重な時間を割いていただき、本当にありがとうございました。また、三島村役場の大山さんには、鹿児島市内を出発する時からお世話していただき、またT看護師とS保健師と調整をとっていただき、感謝しています。

本当にありがとうございました。

【引用文献】

- 1) 平山絵美：沖縄県の保健医療対策の現状と課題～離島における医療提供体制を中心として～. 2008.5, No281, p58.
- 2) 三島村・枕崎市（2009.3）：三島村地域公共交通総合連携計画.
- 3) 谷川典大：鹿児島県硫黄島におけるツーリズムの現状と課題, 日本島嶼学会, 島嶼研究 第4号, 2005, 3, p100.